社会教育委員ニューズレター　第13号

発行　佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局　佐賀県県民環境部まなび課内

県社教委連第１回役員会

５月12日、年度初めの役員会を開催しました。

協議事項として、令和３年度佐賀県社会教育委員連絡協議会役員案、令和２年度事業報告・決算報告、令和３年度活動方針案、令和３年度事業計画案及び収支予算案等について協議し、総会に諮ることが決定されました。

活動方針案では、ＧＩＧＡスクール構想による学校へのタブレット配布で学校が大きく変わるときに地域が変わらなくてよいのかという問題提起がありました。学校教育と社会教育の連携を進めるために、今年はぜひ教育委員との意見交換の場を設け、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動について議論をお願いします。子どもたちが学校に行かなかったとしても、希望する子どもたちが公民館等でいろいろな体験活動を行う機会を意識的に作っていく必要があります。

また、「佐賀県社会教育委員連絡協議会表彰」については、４名の方の表彰が決定されました。

令和３年度　佐賀県社会教育委員連絡協議会役員

役　職	氏　　名	所　　属
会　長	上野　景三	佐城（佐賀市）
副会長	山口ひろみ	県社会教育委員
副会長	平山　潮恩	唐松（玄海町）
理　事	中尾　勇二	三神（鳥栖市）
理　事	中嶋八重廣	杵西（伊万里市）
理　事	竹下　勇	藤津（鹿島市）
監　事	南里　豊	杵西（大町町）
監　事	重松　規昌	三神（上峰町）

県社教委連総会

６月１日、多久市中央公民館において、多久市教育委員会の御後援により開催しました。

○開会行事

上野会長からコロナにより学校生活が変わるときに、地域や社会教育、公民館が今のままでよいのかというお話がありました。

つづいて、地元多久市の田原優子教育長からは「なぜすべてのことにお膳立てをするのだろうか。子どもたちは失敗してもいい。失敗しなければいけない。教員は見守るだけでいい。カレー作りに１グループ失敗したが、子どもたちのアイデアでみんなで分けようということになった。すてきな考えであるし、失敗によって先生の説明ややり方をよく見ておかなければいけなかったという気づきも生まれる。企画する側も失敗することも念頭にした体験活動があればいいなと思う。少しおおらかな世の中にしてまいりませんか。」と祝辞を述べられました。

○県社教委連表彰

平成30年度から創設した標記表彰について、今年度は４名の方を表彰しました。

＊受賞おめでとうございます。

江北町　三苫紀美子氏（25年）
鳥栖市　服部奈緒美氏（13年）
みやき町　向井敏子氏（13年）
伊万里市　田内法子氏（11年）

（　）は、社会教育委員在任の期間

【表彰基準】
社会教育委員として10年以上在任し、社会教育の振興に功績があった者

左端が三苫さん、上野会長の右側が向井さんです。そのほかの方は代理の方です。

○議　事

議長に鹿島市の竹下委員が選出され、議長進行のもとに次の４議案について審議され、異議なく承認されました。

第１号議案
令和２年度事業報告及び決算報告並びに監査報告について

令和２年度はコロナ禍により全国や九州の大会や会議が書面開催やオンライン開催となりました。また、県の総会等も年度前半は書面開催となりました。そのため、旅費や会議費の支出が少なくなりました。

実践研修会を１月に開催しました。多くの社会教育委員や行政職員の参加がありました。

南里監事から監査報告が行われ、適正に処理されていたことが報告されました。

第２号議案
令和３年度佐賀県社会教育委員連絡協議会役員について

１頁の表のとおり令和３年度の役員が承認されました。

第３号議案
令和３年度活動方針案について

今年度の活動方針案については、次のとおりです。

特に１項目目は、佐賀県社会教育委員の会議において今夏に予定されている提言の内容に沿った方針案になっています。

《令和３年度活動方針》

一　コロナ禍によって子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。社会教育委員は「地域の学校」「地域で育てる子ども」をテーマに、学校教育と社会教育の連携を進めよう。

二　ニューズレター年２回発行や社会教育委員の「見える化」を図り、広く住民に社会教育委員の活動を広めよう。

三　教育委員との意見交換の場を設け、協議を深めよう。

四　社会教育計画・生涯学習計画の策定を進めよう。

第４号議案
令和３年度事業計画並びに予算について

10月に全国社会教育研究大会石川大会、12月に九州ブロック社会教育研究大会、１月に県社会教育委員実践研修会が開催予定です。

基礎研修会

総会終了後に基礎研修会を開催しました。今夏に佐賀県社会教育委員の会議で「佐賀の未来を拓く地域・学校・家庭のきずなづくりを目指して」というテーマで提言を出されようとしています。基礎研修会では、この提言内容の骨子等について上野委員長、山口副委員長及び須貝県まなび課係長から紹介されました。

それぞれの方の発言の要旨は、次のとおりです。

（上野）これまでも地域・学校・家庭の連携は言われてきたが、このコロナ禍においては緊迫感をもって取り組む必要がある。昨年、休校要請期間中にいくつかの学校を訪問したが、どの校長先生も学校再開を望んでおられた。ス

テイホームによって実は子どもたちの命が危機にさらされているような家庭もあるということを暗に言われたのだろう。

緊急事態宣言下で社会教育関係施設は休館になった。保育園や学童は開き、一部の学校では登校措置がとられた中で、社会教育施設は何もできなかったという思いが私の中にはあった。制約がある中で何ができるのかを考えていく必要があるとの思いから、これからの時代には新しい連携が求められるのではないかというのが提言のテーマ設定の１点目の理由である。

２点目は、ＧＩＧＡスクール構想により５年後、10年後の学校教育のあり方というのは変わっていくと予測される。福岡県の中学校では３年生に修学旅行をさせたいとの思いで行先を県内に変更され、どんな体験をさせるか真剣に議論され、これまでやったことがないような新しい修学旅行というものを実現されたと聞いた。こういった経験をされた先生方は、元の形のような修学旅行に戻ることはなく、新しい一歩を踏み出していこうとされるだろう。それでは社会教育はどうするのか、ということを真剣に考えざるを得ないのではないだろうか。

３点目は、このコロナ禍においてステイホームは言われるが、ステイコミュニティとは言われない。子どもの居場所づくりをしている方に聴くと、学校に行けない、家庭にも居場所がない子どもたちのために活動されていた。ステイホームの時期に子どもが外にいると批判されるが、その地域ではそんなことはなかったと言われた。日常的な信頼関係がないところではそういった活動は難しい。これからステイコミュニティと言われるような新しい社会教育活動に取り組んでいくことが求められるだろう。一つの切り口として地域・家庭・学校の新しい連携の在り方を考えていかざるを得ないだろう。今回の研修会では、新しい連携の必要性や在り方について一緒に考えていきたい。

（須貝） 提言案に込められた願いと背景について説明する。

コロナ禍により格差が広がって困難を抱える人々の状況がより深刻さを増しているのではないだろうか。社会教育・生涯学習は、コロナ禍の始めこそ戸惑いを覚えたものの、従来の経験や学びを基に新たな実践や学び、つながりを持ち始めている。

第10期中央教育審議会の議論の中でも「命を守り、誰一人として取り残さない社会の実現へ」が目指されている。新学習指導要領で「社会に開かれた教育課程」が目指されている。「つながる」「開かれた」「取りこぼさない」というキーワードが散見される。社会教育は、学校教育の変化と同じように変化のときを迎えているのではないか。そのような中、本日の研修では子どもの状況について特に取り上げ、社会教育委員や社会教育・生涯学習行政に携わる職員に「地域で子どもを育てること」について一緒に考えていただきたい。

昨年、緊急事態宣言で学校が休校になったが、子どもたちは学校や学童に通った。学校が開かないと困る子どもたちや家庭があったからである。校長先生方は早く学校を開けたいと言われていた。命の危機にさらされている子どもたちがいるという焦りがあったからである。コロナ禍でより深刻さを増すのが子どもの貧困の問題ではないか。学校の中での深刻さも学校の外側に伝わらないというのが現状である。

全国で18歳以上の子どもがいる世帯は、全世帯数の５分の１を超える。７人に１人の割合で子どもの貧困が見られ、母子家庭世帯の過半数が貧困家庭となっている。佐賀県でも世帯の平均人数が３人を割り、夫婦のみやひとり親世帯が増加している。要保護・準要保護、更にその予備軍の児童生徒も多い。学童は希望者が多いものの対応できていない。経済的な理由で進学をあきらめる子どももいる。さらにヤングケアラーの問題も顕著になってきた。住居や衣服の状況から貧困を察知するのは難しく、支援の手が届きにくい。家庭の所得の差が子どもの体験活動、経験不足、学びの格差にも大きな影響を与えている。支援の対象が限られる福祉分野ではなく、いつでも

だれでも開かれた学びによって地域で子どもを育てることができないかということを提案したい。

特に、佐賀県社会教育委員の会議では、昨年７月から「佐賀県の未来を拓く地域・学校・家庭のきずなづくりを目指して」というテーマで会議を行ってきた。家庭や子どもの育ちが多様化し、今までのシステムでは取りこぼされる子どもや家庭が出てきていると危惧している。地域で子どもに接する事業、子どもを持つ家庭をサポートする事業はどれほどあるだろうか。地域の一部の機関や個人の頑張りに頼り切っていないか。その方々の高齢化の問題も深刻になってくる。子どものいる家庭は少数派かもしれないが、子どもの家庭の困りを解消することは地域づくりにとって大変重要な課題の一つである。しかし、地域の家庭の環境も変化し、教育力が低下しているように、どのように子どもと関わっていいのかその方法が分からないという声がある。そこで、地域と子どもの関わりの手段の一つとして、提言では地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの推進を考えている。

また、現時点での提言の柱立ては、地域学校協働活動の推進を図る、学校と地域との連携を教育課程へと位置付ける、コーディネーターの発掘・配置及び研修機会の設置の３つである。

１つ目の地域学校協働活動は、地域の力を組織化して学校と連携することで次世代の郷土をつくる人材の育成、学校を核とした地域の創生を目指すものになっている。この活動について周知を図るために、市町の社会教育委員の会議や教育委員の会議、そして社会教育委員と教育委員の会議の場でも説明したい。さらには、議題として取り上げてほしい。また、公民館職員等の社会教育関係者や地域住民にも周知したい。

２つ目の社会教育と学校教育の連携については、教育課程に位置づけをして、地域住民も参画できるようなシステムの構築をお願いしたい。また、教職員研修で地域学校協働活動やコミュニティ・スクールについて取りあげていただきたい。

提言の３つ目、コーディネーターの発掘・配置について、地域学校協働活動は郷土学習や地域行事、農業体験、登下校の見守り、スポーツ体験活動、放課後子ども教室等で、もうすでに実施している所も多いと思うが、この活動推進のために国や県は補助も行っている。また、地域学校協働活動を円滑に進めるための地域のコーディネーターである推進員を配置していただきたい。新しい組織を立ち上げるだけでなく、まちづくり協議会等を地域学校協働本部に位置づけることもできる。そして、コーディネーター等の研修を定期的に行う。

県まなび課では、地域学校協働活動を推進するにあたって、昨年度から県の統括コーディネーターを市町に派遣して活動の説明等を行ってきた。さらに学校と地域、社会教育との連携をより効果的に進めるために、社会教育主事講習へ教員を派遣する事業を今年度から始めた。

子どもたちの学びを守るためにもぜひ地域での子育て環境について考えていただきたい。そのために、社会教育委員、市町職員には、まず社会教育委員と教育委員の会議を実現してほしい。そして、社会教育の立場から地域での子育てについて話し合ってほしい。さらに答申や提言等を行ってほしい。

（上野） コロナ禍以前からあった問題がよりはっきり見えてきたり、あるいは広がったり新しく浮上してきた問題もあるのではないだろうか。

ＧＩＧＡスクール構想により学校での授業の代わりにリモートで受けることが可能になる。大学でもｗｉ－ｆｉ環境が整っていない家庭の学生は、ｗｉ－ｆｉ環境が整っている公民館等に行って授業を受けていた。公民館はこういうところで役に立っていることに気づかされた。

通学合宿もこの１年間は中止されていると思う。先ほどの体験活動の温度差のようなものが出てきたときに、子どもはステイホームから格差が広がったりする。それをコミュニティレベルでどう是正していくことができるのかは、社会教育委員に課せられた課題なのではないか。そういった問題を

各市町の社会教育委員の会議で議論をしてほしい。できれば、教育委員と意見交換してほしい。子どもたちのために学校のためにそしてニューノーマルの時代にこういうことに取り組んでいくことについて社会教育計画等の中に盛り込んでいってほしい。

（会場から） 県警少年サポートセンターで子どもたちの居場所作り活動や立ち直り支援活動をしている。虐待や面前ＤＶ等の心理的虐待を警察で扱うと、その情報がセンターにつながり、支援ができる。コロナ禍で居場所づくり活動に来ることができない子どもたちにはアウトリーチで家庭訪問している。

先ほど、校長先生が早く学校を開けたい、命の危機にさらされている子どもたちがいてとても心配されているというお話があった。学校で察知されている子どもたちのことがちゃんと必要な所につながっているだろうか。警察につなげてもらえばセンターで支援することができる。

（会場から） 校長をしている。学校として情報を出していないという指摘は非常に反省をしながら聞いた。昨年度、心配な子どもがいて所轄の警察署に相談した。最終的には保護に至った。日頃から警察と情報交換をしておくことが大事だと思った事案だった。

（須貝） やはり学校で温度差はある。日頃からしっかりつないでいる学校もあれば、まだ開かれてないところもある。子どもたちの命の危機なのにと歯痒い思いをされているところもまだあるのではないか。学校だけで抱え込まずに、地域でつながる。そうすると、学校にとっても子どもたちにとっても地域にとっても過ごしやすくなる。

（会場から） 小学校区単位で地域コミュニティを作り、小中学校がコミュニティ・スクールに取り組む。その２つがリンクする形で地域の中で子どもたちが育っていくという実践を少しずつ続けている。昔遊び教室を小学１年生で行い、地域のお年寄りと交流している。それに加えて、年長さんの体験入学のときに、１年生はお兄ちゃんお姉ちゃん役として昔遊びを教えないといけない。そのためには一生懸命覚えないといけない。そういう中でつながっていく。

また、私たち社会教育委員は、学校や警察、ボランティア、児相などとの仲介役をできないだろうか。情報を共有しながら、そしてコーディネートしながら子どもたちの安全安心を続けることができないだろうか。

（山口） 私は社会教育委員の立場で、先ほどの３つの視点から新しい社会教育委員の形、また新しい社会教育の形とは何なのかということをこの提言でお伝えしたい。社会教育委員はもとより、地域の方々にメッセージとしてお伝えしたい。

〝困難〟の深刻化がコロナ禍で一層進んでいる。先日もひとり親家庭の方から話を聞き、情報が伝わっていない、つながりがなくて自分から声を出して助けてと言えない、ご家庭や子どもたちがたくさんいるということを実感した。それぞれの地域でも声を出したくても出せないご家庭、子どもたちがたくさんいるのではないかなと感じている。社会教育委員として限界もあるが、子どもたちの声や子育て中の方々の声をちょっと気に掛けることはとても大事だ。地域の中で視野を広げて〝困難〟に気づく目を持つことが社会教育委員にとても大切なことではないだろうか。

また、社会教育の良い面は、学校教育、家庭教育支援以上にいろんな人たちとつながるネットワークを持っているところだと思う。その中での橋渡しの役割というのがとても大事だ。さらに社会教育は、一方通行で伝えるだけではなくてお互いに双方向であるというところがとても大切だと思う。その中でも一番大事なのが、活動した後に、一歩踏み出した後に、「これって〝まなび〟だったんだな」と振り返って気付くことではないだろうか。それが社会教育ではないかと思う。田原教育長が言われたように「失敗してもいい」は、社会教育でも同じこと、失敗する

ことで気付くことがたくさんあると思うし、この気づきが大切ではないかと思う。

社会教育委員は縁の下の力持ちだと感じている。素晴らしいことであり、皆さんもぜひ縁の下の力持ちとして地域活動を行っていただきたい。さらに社会教育委員同士もつながり情報交換をしていってほしい。この研修会を機会に自分の住んでいる市町の社会教育委員だけでなく、他の市町の社会教育委員ともつながってほしいと思う。子どもたちの育ちを真ん中において社会教育活動を行っていきたい。

（上野） これまでであれば子どもの貧困問題は福祉、ＤＶであれば警察、通学合宿は社会教育、公民館でやればいいというような棲み分けの世界で生きてきた。しかし、今は福祉なのか警察なのか社会教育なのか分からないボーダーレスの世界になってきた。福祉ではより重篤なご家庭のケアに入られ、警察の方でも重大な案件に手を取られてしまい、そこでまた溝ができてしまう。私ども社会教育の関係者は、これは福祉だ、これは警察の仕事だと切り分けるのはやめて、先ほどの話のように気にかけていこうということである。山口副委員長のまとめは、気にかける中で一歩踏み出してしかるべきところにつないでいくということをやらなければならないし、そういった意味での縁の下の力持ちになりましょうという熱い呼びかけだったかと思う。

提言を完成させるにあたり、ぜひ県内の社会教育委員の方々にお知恵をお借りしたい。提言を基にまた市町ごとにこのテーマについて議論をしていただき、さらに教育委員と意見交換をしていただきたい。

アンケートの内容

基礎研修会終了後に御記入いただいたアンケートの一部を掲載します。（構成上、若干字句を変更しています。）

○提言内容についての御意見

・ＧＩＧＡスクール構想による一人一台のタブレット。発表会や運動会までも人が集まることを避けられている。このようなことが続くと人と接しない、声を出さない、意見のぶつかりも自分の姿を隠してＳＮＳで書き込む。このようなことをそのまま受け入れるのか？社会教育は人が集うこと、人と人が会話することを目指すべきではないか。

・子どもの居場所づくりが課題。直に公共施設を閉じる、この方策は子どもにどんな影響を及ぼしているのかを検証されたことはあるのか。

・社会教育委員が学校教育とどのように連携するのかをシステム化できれば。

・社会教育と学校教育との連携については、重要性を説かれてから10数年ほど経過しており、少しずつであるが、学校・地域・家庭がつながっていると思う。しかし、やはり地域差があるように思え、なかなか進まない地域もあると思う。マンパワーが不足している地域では、とても顕著ではないか。そのような地域への支援をどんどんしてほしい。

○今後の活動について

・それぞれの地域と子ども、そして学校においていろいろな環境の違いがあるため、今回の研修は参考になったが、すべての子どもたちに同様のアプローチの仕方があるのではないか。また、子どもの貧困状況について、知らない情報を得られてよかった。学校や警察と情報を共有し取り組んでいくことの重要さを認識した。

・子どもの貧困が体験・経験に大きく影響していると知り、自分が子供時代に体験していたことができない子どもが多いことに驚いた。民生委員として「心豊かな子どもを育てる活動」で、これからは子どもたちに体験や経験をさせる内容にしていきたい。

・子どもや家庭の困り感や貧困の問題に関しては、社会教育委員、民生児童委員双方の立場からアクセスすることができるのかなと感じました。今まで以上に目配りをしながら活動を深めていきたい

・社会教育委員は様々な団体から

の代表であり、いろいろな活動をしている。地域学校協働本部など、ネットワークの中心になって活動できるようにつなげていかなければならない。

・施設の利用制限（安全第一）とコミュニティ活動の推進とのバランスのヒントとなった。

・提言について、市町に持ち帰り社会教育委員の会議で議論する。そして、教育委員会と合同会議を行って議論する。

・貧困に悩んでいる子どもたちが身近にいるということ、低所得のために体験活動に限りがあるということ、今まで目に止めていなかった課題に触れることができた。現時点で私たちが子どもたちにできることを考え行動していきたい。

第63回全国社会教育研究大会石川大会　概要予告

開催趣旨の概要

社会教育には、新たな役割として、社会教育を基盤として「人づくり」「地域づくり」「つながりづくり」が期待されている。社会教育委員は、地域の実情を熟知し、地域課題解決に広い見識と豊富な経験を有することから、社会教育の指導者といっていい。かつて孔子は指導者に智・仁・勇を求めた。

小松市は歌舞伎の勧進帳の舞台となり、弁慶の智、富樫の仁、義経の勇が描かれ、智仁勇が古くから大切に受け継がれてきた。本大会の開催地として、まさにふさわしい場所である。

大会スローガン

今こそ攻めの社会教育を！
いよっ社会教育委員！

研究主題

地域の未来を創る社会教育のさらなる挑戦
～智仁勇が未来をクリエイトする～

期　日

令和３年10月28日(木)
全国社教連総会・開会行事・記念講演・シンポジウム
令和３年10月29日(金)
分科会
①家庭教育支援
②青少年の健全育成
③地域文化の振興
④地域の活性化
⑤社会教育委員の役割

会　場

こまつ芸術劇場うらら　ほか

第51回九州ブロック社会教育研究大会長崎大会概要予告

開催趣旨の概要

本大会では、各県・各地域の多様な「連携・協働」の実践について学び合い、語り合うことを通して、「住みたい、住み続けたい、もどってきたい」ふるさとづくりに向けた、社会教育の新たな可能性を考える契機とする。

研究テーマ

人を育み、人をつなぎ、持続可能なふるさとをつくる社会教育を目指して
～連携・協働をキーワードに～

期　日

令和３年12月18日(土)
分科会
①人を育む
②つながりを育む
③ふるさとをつくる
④社会教育委員の役割と活動
令和３年12月19日(日)
全体会

会　場

長崎大学文教キャンパス

［インタビュー・ダイアローグ］
『みんなでつくる　ふるさとのカタチ
～ふるさとへの思いと、これから私たちができること～』

【シリーズ】わたしの社会教育委員活動（３）

「警察と社会教育
～連結ピンになる～」

佐賀市　社会教育委員
松　隈　智　子

私は、警察職員ですが、佐賀市の社会教育委員をさせていただいております。

「警察」が「社会教育」と聞いて、耳を疑う方もおられるのではないでしょうか。

私からは、「警察と社会教育」に

ついて、私の感じていることをお伝えできればと思います。警察と社会教育がつながる理由。その理由は、私たちが「警察の中で担っている任務」にあります。私たちの勤務の日常から、その理由を紐解いていきます。

私は、佐賀県警察本部生活安全部人身安全・少年課の附置機関である「佐賀県警察少年サポートセンター」に勤務し、非行少年や被害少年の立ち直り支援活動を行っており、毎日のように、支援をしている対象少年が当センターを訪れます。

ある日、ある少女が面接に訪れました。「松隈ぁ。何かいらつくとばってん。」と落ち着きなくイライラしている様子でした。当センターの職員はそんな少女を見て、叱ったりしません。「なに？なに？どうした？話を聴くよ。」と言ってすぐさま耳を傾けます。

私と少女は、私が薬物乱用防止教室で講話をした際、感想文に「家のことで悩んでいる。話を聴いてほしい。」と書いてくれたのがきっかけで出会いました。

そこから、私と少女は手紙でやりとりをし、電話で話し、学校と連携して学校に訪問し、面接もしました。その過程で、少女が幼少のころ経験した強い喪失体験が要因となり、自分では理解できない心のコントロール不全になっていることが分かってきたのです。少女の行動が非行に転じないよう、支援が必要だと判断した私は、保護者に支援の同意を得ようと電話連絡しました。しかし、保護者からは開口一番、「うちは警察の支援は必要ありません。私は私のやり方で育てますから。」と一蹴されたのです。私は諦めず保護者に、私が面接して理解した少女の心の課題や問題行動、そして、当センターの活動について粘り強く説明し、更に保護者の少女に対する思いや不満を傾聴し続けました。１時間以上話したでしょうか。保護者はだんだん声が柔らかくなり、「そしたら任せますから。」と言ってくださったのです。

当センターでは、月に２回、少年の立ち直り支援活動の一環として「居場所づくり」活動を行っています。

少年が立ち直るのには、「自分たちを応援してくれる人が地域にたくさんいる」「大人が自分を受け入れてくれる」「自分は人の役に立つことができる」という体験が不可欠です。ですので、対象少年をこの「居場所づくり」活動に参加させ、多くのボランティアさんと交流させます。

少女も、毎回のようにこの活動に参加していますが、大学生ボランティアと喧嘩して泣いて逃げ出そうとしたり、地域ボランティアさんが嫌いと言って怒ったこともあります。その瞬間を当センター職員は見逃しません。「チャンス到来！！」と言って少女に寄り添い、「どうすれば喧嘩せずにすんだのか」「どのように考えたら悪く考えずにすむか」と活動中にじっくり話し込みます。

つまり、「居場所づくり」活動は、生きづらさを抱え、人とのコミュニケーションがうまくいかない少年が、ＳＳＴ（ソーシャル・スキル・トレーニング）を重ねる場所になっているのです。

私たちは、少年に「この居場所では失敗していいのだ」と伝えています。失敗して、どうすればよいのか、私たち専門家やボランティアさんがその時その場で一緒に考え、ゆっくり伴走します。その、伴走された経験が少年の自信になり、社会に出て問題に出くわしたときに、自分で乗り越えるスキルになっているのです。

社会教育とは、「人づくり」「地域づくり」「絆づくり」であると考えます。

「居場所づくり」活動には、支援される少年を中心に、地域協力者、大学生、保護者が集まり、少年と交流することで、「気づき」や「学び」や「つながり」が芽生えます。

私たち警察が、地域の絆の連結ピンになれるのではと思っており、これからも皆様と力を合わせて「少年が生きる力を身につける社会教育」に携わっていければと思っています。

「社会教育委員活動を通して」

基山町　社会教育委員
藤　丸　信　一

基山町は、佐賀県の東端に位置

し、人口が約１万７千人と小さな町ではありますが、国の特別史跡である「基肄城跡」や四季折々を楽しむことが出来る「大興善寺」など豊かな歴史と自然によって育まれた美しい風景が魅力的な町です。

また、九州内交通の基幹となる国道３号線やＪＲ鹿児島本線、高速バス基山ＰＡなど、九州内の移動にも大変便利というところも魅力の一つです。

基山町社会教育委員の主な活動内容としては、年３回の会議、人権・同和教育などの研修会への参加を行っています。

さらに、基山町民会館運営審議会も担っているため、年１回ほど、基山町の体育施設、文化施設の指定管理制度が活用されているかどうか、訪れた方々が安心・安全に利用できているのかを審議しております。

私は、社会教育委員に任命されてから10年間様々な活動をしてきましたが、社会教育委員に任命される前は、社会教育指導員として４年間務めておりました。

青少年育成町民会議の事務局として、町内の小・中学生を対象とした通学合宿や自然体験等登山活動を行い、子どもたちに町の魅力の一つである、豊かな自然に触れてもらうことで、故郷基山を大切に思う気持ちを育むことが目的でしたが、それに加えて、子どもたちに指導する高齢者の方々とも交流できる場となっておりました。

また、現在は民生委員・児童委員として、地域の人たちが安心して暮らせるように活動しているほか、町内の児童養護施設や高齢者福祉施設で福祉活動やスポーツ大会など様々な活動にも取り組んでいます。

14年間社会教育に携わり、学んだ知識や経験をこれからの活動に取り入れ、活気あふれる基山町にしていくために、日々活動していきます。

また、新型コロナウイルス感染症を通して改めて実感した、活動できることへの感謝の気持ちを忘れず、日々努めてまいります。

【大人もこどもも仲良く過ごす公民館開放日の様子】

「社会教育委員として思うこと」

伊万里市　社会教育委員　池田豊子

私は、伊万里市の社会教育委員に任命されて４年目になります。社会教育との出合いは、学校に勤務していた時、特に教頭として学校運営に携わるようになってからです。

南波多中学校勤務の時、地域コーディネーターの方々のおかげで色々な学校行事や活動を行うことができました。特に思い出深い取組みは、郷土学習と川柳教室です。

郷土学習は、講師の先生方を招いて３年間で町内を一周する学習でした。１年ごとにコースが変わり、講師の先生方には資料の作成と説明をお願いしました。生徒にも好評で、生きた郷土学習になりました。

川柳教室では、毎月１回全校生徒が朝の川柳教室の時間にテーマに沿った川柳を作ります。講師の先生による指導や町内関係の方々による審査を経て、学校便りに全校生徒分を掲載するとともに、町内に全戸配布することで学校と地域の結び付きにも繋がりました。

このように、私にとって社会教育とは、学校教育を進める上で欠かすことのできないものであり、地域の力で成り立っているものだということがよくわかりました。

さて、現在の私は、社会教育委員の他に地区の民生委員・児童委員の会長、市の青少年相談室の相談員等の役割を担っています。昨年からのコロナ禍の中で多くの行事や活動、会議が中止になったりしましたが、できることを続けています。

今、個人的に行っていることは、朝のあいさつ見守り活動です。小・中・高の児童生徒や外国人の技能実習生の方々と毎朝あいさつを交わしています。私の住む黒川町には造船所があり、20年以上前から

インドネシアの技能実習生の方々が働いています。町の人口は３千人弱ですが、その１割程度が外国人技能実習生です。雨の日も晴れの日も自転車に乗って通勤されています。「おはようございます。」「今日も１日元気で頑張って。」などと声を掛けます。皆さん笑顔で「おはようございます。」とか会釈であいさつをされます。信号待ちでは、「暑いですね。」「寒いですね。」「朝ごはん食べた？」とか会話をします。私は小さな国際交流と思っています。

【朝のあいさつ見守り運動】

地区全体の活動としては、ひとり暮らしの高齢者の見守りや12月のシクラメンの花のプレゼント、寒い時期のふれあい弁当の配布活動をしています。

伊万里市の人口の約５万人の約30パーセントは65歳以上の高齢者です。福祉や医療・介護の問題も避けては通れなくなりました。少子高齢化が進み、災害やコロナ禍が日常の生活に影響している今こそ、私たちは地域全体であらゆる問題に取り組んでいかなければなりません。

暗いニュースの中、伊万里市に明るいニュースがありました。１つ目は、黒川町で子どもの読書を推進する活動を行っている『おはなしどんぐり』が、子供の読書活動優秀実践団体の文部科学大臣表彰を受賞されたことです。伊万里市は、「家読」の推進を図られており、地域での地道な子どもたちへの読み聞かせ等の活動に対しての結果だと思います。

２つ目は、今回の東京オリンピックの水泳競技で選手として出場する高校３年生の男子選手が伊万里市出身であることです。中学校までは市内の中学校に通い、水泳競技に熱心に取り組まれていました。高校は関東ですが、これまでの学校教育や地域での社会教育、社会体育が実を結んだのだと思います。

これからの社会教育は、色々な分野の中で行われるものであり、境界線はないと思います。学校教育、家庭教育、社会教育、それらがすべて生涯教育に繋がりがあるもので、地域・社会の中で学び進めていくものだと思います。

私も社会教育委員として大きなことではなくても、今できることを一つ一つ地道に努力し、関係諸機関とも協力しながら実践を継続し、地域から町へ、市へ、県へとより良く生きる社会づくりの活動を広めていきたいと思います。

「温故知新の社会教育」

江北町　社会教育委員
大　串　壽　春

地域住民が楽しく生きていく上で必要なことは、生きがいを持って周りと協力しながら生活するという、社会教育の基本計画を進めることだと思う。

私たちは、過去の生活は「向こう三軒両隣」の精神で助け合い、日常心の挨拶だけで、心のつながりと地域社会の連携ができ生活してきたように思える。

時代と共に物は豊かになり、経済・科学・情報文明は発達してきた。私たちは、心の文化、地域の文化活動等を通して、社会の変化、価値観の変化への順応が必要と感じる。人との連携が粗悪になってはいけない。

大切なことは、本来身近な人同士、地域の幼児から高齢者まで、個々の考えを尊重し、困ったときはお互いに助け合い、協力し合うことだ。

そのためには、地域連携の組織づくり、環境づくりが不可欠であろう。

古くは、地域を結びつける子どもクラブはじめ、各種社会教育団体や三夜町、六夜町、観音講などの地域組織により、三夜町・観音講・佐奈彫り・夏祭り・供日等の年中行事が頻繁に行われていた。これは、家族や先輩後輩、地域役員との連携・協力関係の上に成り立っており社会教育が自然に出来ていた。

今日の情報化社会では、個々に教養を学ぶことができるがゆえに互いに協調出来ているかが不安である。ネットやメディアの知識や

教養は、面白くもあり、可笑しくもある。その情報を、周りの人と語り、健全育成に生かすことができたらと思う。

人と人との争い、揉め事、犯罪も見て見ぬふり、子どものいじめにおいても他人事ではないことを誰もが意識できれば良い。

情報文明社会がどんなに進んでも、多様な思考力が望まれ個性が反映することこそが必要だと思う。

小さい町に住んでも、川辺の遊びと、山辺の遊びは大きく違った。川で魚を取ったりカニを取ったり、田んぼで遊んだりして、生きる力を身につけた。山辺の子どもは竹林で遊び、メジロを取ったり、ミカンや枇杷を取ったり、そんな同志が友となり、尊敬しあえた時があった。

私は介護施設に携わってもいる関係で、今日の少子・高齢化社会における介護制度においても、家族（親子）の絆の希薄を感じてならない。老化すれば介護制度で施設利用のレールへと端的に進む。生活上は便利でよい部分はあるが、老化・認知でも施設より家族内で過ごしたいと願っている。

今や、経済社会と便利社会は一考の余地があると思える。家族（親子）の良い関係の家庭教育から犯罪のない社会は生まれる。介護も地域で支え合い、行政も健康維持を推進しサロンづくりに舵を切ったようにも思う。

社会教育は人づくり、心づくりである。社会教育の総合的本質のあるべき姿に計画を進め、いじめ、暴走、犯罪、災害、介護問題等の非社会的事象をなくすために総力をあげていきたい。

わが町でも、ノーテレビ、ノーゲーム、ノースマホデーを推進しており、家族と人との語らいで心の通う地域づくりに取り組んでいる。

【書道教室（月に２回開催）】

編集後記

今年も首都圏を中心に緊急事態宣言等が発令されるなど新型コロナウイルス感染症に振り回され、多難な一年になりそうです。６月の総会・基礎研修会も開催できるかどうか一抹の不安を抱えておりました。しかし、開催日が近づくにつれ新規感染者も落ち着いた状況となり、また、多くの社会教育委員の皆さまや市町職員にお集まりいただき、会場からも活発な御発言をいただき、盛会裡に開催することができました。感謝申し上げます。

今号では、基礎研修会の概要について掲載させていただきました。今夏に県社会教育委員の会議において提言を予定されている内容について三者三様の語り口で熱く語っていただきました。研修会の中でも言われていたように、この提言が活かされるかどうかは市町の社会教育委員の皆さまにかかっています。ぜひ教育委員の皆さまとも熱く語り合っていただけたらと思います。

さて、第11号から社会教育委員の皆さまに「わたしの社会教育委員活動」というテーマで、御執筆いただいています。今回も警察における居場所づくり活動など、日ごろの取組や社会教育に対する想いなどについて御紹介いただきました。社会教育のカタチにもいろいろあるというか、逆に融通無碍に多方面の活動に関わっていけるのが社会教育のいいところなのかもしれないなと考えたところです。

基本的には市町の輪番により、その市町の委員の方に御執筆いただいていますが、飛び入り大歓迎です。我こそはという方はぜひ事務局まで御連絡ください。よろしくお願いします。

****
佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局（佐賀県県民環境部まなび課）
〒８４０－８５７０（住所不要）
TEL　０９５２（２５）７３１３
Fax　０９５２（２５）７４０６
✉　manabi@pref.saga.lg.jp
****